

映倫



この作品は、映画館でのみご覧いただけます。

私は、この作品を作るためにずっと映画に関わってきたのかもしれない。

そんな、自分の理由になるくらいの作品ができました。 — 企画・プロデュース 齊藤工

製作陣からの被写体だけでなく、
全ての人間へのエールを感じました
周囲より少し先に、大人にならざるを
得なかった子どもたちの幸せを願います

— MOROHA アフロ (アーティスト)

登場する子どもたちの言葉ひとつひとつが、
心に響きました。 — 松本大洋 (漫画家)

この映画で、一つの家族の形を知ることができる。
子どもたちの表情を、紡ぐ言葉を、知ることができる。
その一つ一つが忘れられず、
これから先も自分の心に残り続けると思います。
子どもたちの光ある未来を切に願います。

— 桜井ユキ (女優)

どこにでもいる普通の子どものたちの日常に
見えるのに、確実に匂ってくる寂しさと力強さ、
それでも前に進もうという覚悟。
光に満ち溢れた、明るい未来を願わずにはいられない。

— 赤ペン 瀧川 (俳優/映画プレゼンター)

なんか、言葉とかで評したくない。
そんなんで評せないから。
みてほしい。
みたあとに語りたい、とかも、ない。
ただただ、みてほしい。
どこから来たのかわからん涙がでた。

— 金沢知樹 (脚本家「サンシャイン・警視庁」)

多分もう、みんなの顔を忘れられない気がする。
会ったこともないのに、大切な人が増えてしまった
ような感じ。

— 上出遼平 (テレビプロデューサー)
「ハルビ」以来の再会です。



STORY

親と離れて暮らす子どもたちの成長リアリティ。

ここは、東京のとある児童養護施設。子どもたちは親と離れ、血の繋がりのない他の子どもや職員と日々を過ごしています。両親への想い。生活を身近で支える職員との関係性。学校の友だちとの距離感や、施設を出たあとの暮らし。家族とも他人とも言い切れないつながりの中で育つうちに、子どもたちの葛藤はさまざまに変化していきます。何を思い、何に悩み、何を受け入れて

どう大人になっていくのか。戸惑いながらも確かに成長していく子どもたちの姿と、それをやさしく包みこむあたたかな眼差し。映っているのは決して特別な事件などではなく、些細だけれど大切な日常の景色です。観終わった時、きっとあなたは彼らだけでなく自分自身が歩んできた道のりをも肯定したくなる。そして“ふつう”が少しだけ広がり、明日をまた生きていく勇気をもらえる123分です。

【名画座2本立て】

6/27(金)～7/3(木) 上映
併映作品『14歳の栞』

JR 大塚・東口 西武 池袋店 5F
「テアトルシネマグループ」
キネカ大森
03 (3762) 6000 ttcg.jp